

2003 年末の正月休みを利用して、烏里烏沙さんの主幸する旅に入れてもらい、四川省甘孜州の「丹巴」へ行きました。この丹巴地方独特の古い石の塔「古碉」のことは日本ではほとんど知られていないようです。悲劇的だったらしい歴史上のこともよく分からないそうです。歳月に耐えてきたせいか、微妙に傾いているものもあり、そこに手作りを感じます。美しい溪谷に屹立しているさまは、戦乱の哀しみを感じます。いずれこの地も観光客が増えることでしょう。それでも丹巴の人々の心が、「開発」されないことを願います。近年、丹巴県の中でも、「巴底」という集落は美人が多いとかで、観光用に“美人谷”と呼ばれるようになりました。



●中国の道は、心臓に悪い

丹巴のチベット族の人たちは、とんでもない高み住んでいる。奥多摩などにも、「ずいぶん高いところに、家があるな」と思うところはある。しかしその比ではない。天上といってもよいくらいだ。空気が乾燥して透明度が高いせいか、谷の向こうに点在する白い家々がはっきり認識できる。それらは、谷底から観た場合、頸をかなり曲げないと、見えないほどの高さにある。ほとんどの人は車を持たないから、丹巴の街へ所用があるときは、歩いて通うしかない。たまたま車が通りかかると、乗せてもらえるようだが、歩きだと一日がかりの仕事だろう、荷物は担ぐ。集落によっては、車道がないところもありそうだ。

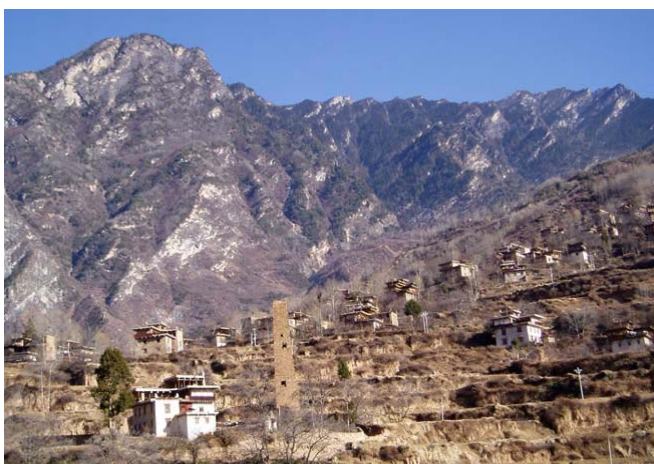
こんな厳しい環境の中で暮らす人々は、バスで通りかかる我々に手を振ったり、人なつっこい。「観光ずれ」していないし、誇りも高そうだ。半数くらいの家には BS アンテナがある。これが昔から作りつけてあったみたいに、建物の景観にうまく収まっている。テレビは観るらしい。

2003 年 12 月 31 日朝、丹巴のホテルを出発。今日は地元駐在の大川氏の案内で、チベット族の家庭を訪ねる。成都から乗ってきた王さん運転のバスで、大金川に沿った路を上流に向う。かなりの水量の碧色の流れが谷を駆け下っている。後で地図をみると、丹巴付近で3つの流れが合わさり、大渡河と名を変えて、長江の支流の岷江にそそいでいるのを知った。バスから見上げる四方は、4～5千メートル級の山並みだ。岩盤の山肌がかぶさるように聳え、青空が見える割合が少ない。10分ほど進むと、幹線道路から枝路に入った。ここから、ぐいぐいと高度を稼ぐ。ガード

レールとか、縁石とかは無い。バスがヘアピンカーブで半円を描くと、谷と山の位置が入れ替わる。こちらは座っているだけなので、回転寿司のように、谷側の景色が流れてくる。窓越しに見下ろすと、岩肌は尋常でない傾斜角で奈落の底まで続いている。さっきまでバスの脇を流れていた大金川は、今は碧い帯となって俯瞰できる。目も眩む高度感だ。高度計でチェックすると、谷底まで300～400mはある。

なーんだたいしたことは無いじゃないか、と思う人もいるかもしれない。私がすぐ思いつく日本での隘路は、たとえば「南アルプススーパー林道」の夜叉神峠を出たあたりで、傾斜角度も同じくらいと思う。そこを初めてバスで通ったときは、高度感からの恐怖で体を硬くして窓の外を見入ったものだ。日本では崖でも灌木があるが、このあたりは植生に乏しく、斜面には冬枯れした草がわずかに岩にしがみついているばかりだ。転落すれば、谷底まで止まらないだろう。

次のヘアピンカーブを半回転すると、窓の外は山側になる。したがって、怖い谷底を俯瞰しなくて済む。しかし山側は、落石が心配だ。目に付くのは、不安定に鎮座した、大石、小石。スタート台よろしく、崖にへばり付いている。実際、バスは所々にある落石を避けて通っている。どうか落石は別の日にお願いします、と念じる。進んでゆくと、道路は舗装がなくなり、すれ違いができないほど狭くなった。運転手の王さんは、バスと一体になり、忙しくハンドルを捌く。路面の岩を避けているのだろうが、わざわざ岩に乗り上げているのかと思うほどの揺れだ。小舟で荒海に乗り出しているようで、木の葉のように揺れる。スプリン



上へ上へと続くチベット族の家



丹巴地方独特の古碉群、高さが40～50メートルもあるものがある

グが硬いせいか路面のデコボコが忠実に伝わる。肘掛けをしっかりと握り、足を踏ん張らないと、座席から放り出されてしまう。きのう、別の集落で車体に大きく「一路平安」と書いてあるトラックを観た。安全標語は気休めでなく、必須なのだ。バスは途中で石材採取中(山肌から、勝手に持ち去っているように見えた)のトラックを、すれ違いのため数十分待ったりしたが、運転者、乗客とも試練を乗り切り、山の中腹の「甲居」という集落に着いた。

●大展望のテラスの家

大川さんの奥さんの実家(ナムさん宅)近くにバスは停止した。そこは、かなりの高みで、この地方独特の「童話の家」風の小さな白い家が、広い斜面に散在していた。壁は石を積み上げて作り、外側に白い塗料を吹き付けて化粧する。木材で巧みに内装し、各家はおよそ3階建てだ。2階部分の屋根は平らで、広いバルコニーにもなっている。ここからの眺めはすばらしく、たとえば北アルプスの稜線にある山小屋のテラスだ。広い斜面が、大金川までさえぎるもの無く続いている。その斜面には、白い家がほどよい間隔で散在する。遠景は、目の届く限り続く、ギザギザの岩山で、青黒くかすんでいる。取り囲む山波は、不浄の外界との仕切となっているように思えた。展望のよいこの場所は、作業場や、農作物の乾燥場が本来の目的。最上階の屋上部分のカドカドには、スレート状の石をとんがり帽子型に積み上げた「ツノ」があり、思うに飾りか、魔よけのようだ。ここに小旗を立てるので、離れて観ると童話の家的なアクセントになっている。1階部分は豚(黒豚)を飼っているのが標準で、これが不思議と臭くないのは乾燥のせいか。日本の場合、養豚場とか、養鶏場はかなり臭うのだが。

豚の干し肉は「老腊肉」といって、ここの人々の重要な食料のようだ。これを干しているのを初めて観たときは度肝を抜かれた。豚の体をCTスキャンのように、連続の輪切りにして吊るす(写真)。縦の輪切りや、横の輪切りもある。どうやってこのように鮮やかに真っ直ぐ、切れるのか。肉の数でその家の経済規模を推しはかれるそうだ。永く(数年)干したものは味が良くなるらしい。

この家で昼食のもてなしを受けた。「血」の腸詰めや「モモ(チベット餃子)」など日本人には珍しいものをご馳走になり、かねがね聞いていた、「バター茶」も飲んだ。温かい団らんに皆、和んだ。またまた今日も満腹になって、次の目的地、胸ときめきの“美人谷”に向かう。



豚の干し肉、これが1頭分。左が頭、右端は足



大渡河の清冽な流れと吊り橋、橋桁は板張りだが小型車は渡る

●名前が嬉しい“美人谷”

丹巴に着いてから分かったそうだが、当初の旅程である「马尔康(マルカム)」へ行く車道は夏の大雨による地滑りで通行不能になっていた。我々のバスはその道を丹巴側の通行止め地点まで進入した。バスから降りると、自動車道路は地滑りの土砂で塞がれ、小山ができていた。川の畔に掘っ立て小屋があり、その中で地元の人たちが食事をしたり、暖を取って談笑中だった。ここに数台の小型車が、客待ちをしていた。この手の車を、なんと呼ぶのだろう、一応タクシーとしておこうか。

交通止めは長期化している。用事があって通行する人は、ここまでタクシーで来て、不通区間を徒歩で越える。反対側にも马尔康方面へ連絡するタクシーが数台駐車していて、リレー式に運ぶ仕組みであるのが分かった。タクシーはくたびれた、軽ライトバンクラスがほとんどであった。

我々も、ここから土砂崩れ現場を歩いて横断する。山歩きでいう「高巻き」だ。地滑りの原因と思われる地下水が所々にじみ出して、泥濘となっていたが大した困難もなく、5分ぐらいで、反対側に到着。王さん運転のバスとは、お別れになる(スプリングが壊れて、修理のため)。先に着いていた大川さんが、向こう側のタクシーと交渉していて、100元とのこと。私たちは、目的地も知らないし、1人100元なのか1台100元なのか、分からない。後から来たウリさんが「高い」と判定、運転手の首領格と激しくやり合う。ウリさんは本来のイ(彝)族になって生き生きとしている。

やがて、交渉がまとまって、3台のタクシーに分乗となり、私はくたびれた赤い車に乗ることになった。3台の中で一番ボロい。乗車人数は運転手を入れて合計5人だ。助手席にウリさん、中央列に女性2人(Sさんと、私の連れ合い)、3列目に私が乗る。乗り込むと、後部席に入るために、背もたれを倒す式のシートがない。シートがあるべき所には、野球のベースの様なものをガムテープで巻いた、座席代わりのもがある。シートは壊れて無いのだ。

3台のタクシーは、清冽な大金川に沿って舗装された路を20~30分ほど走る。相変わらず、兩岸は壁のような岩肌が続く。 **[次号に続く]**

●悪夢のドライブ

突然、悪路に変わった。道路が丸石が転がる河原状になっている。左から流入してくる枝沢が氾濫して、道路を押し流してしまったのだ。支流の畔に建っていた民家が半壊となり、かろうじて残った遺構が巨岩の上に乗っている。(後日、中国のインターネットを閲覧したところ上海からの観光客数人が犠牲になった) 鎮魂のためか反物のような赤布が、倒壊した家を囲んでいた。ここで小休止。

3台のタクシーは、洪水跡の残る沢を上流に向かって走り始めた。我がボロタクシーは、しんがりの3番目。先行車のホコリをまともに浴びることになった。この地方が雲母の産地のせい、非常に細かいサラサラの白褐色のホコリである。揺れ動く車中の汚れた窓越しで、よく分からなかったがゴロタ石の間を、ワダチが狭谷の奥に続いている。河原の中に路があったのだ。よくこのボロ車で、と思うデコボコ路を進む。石を乗り越えるときは、ロデオ馬のように尻を振る。中の人間は、洗濯機の中にいる心地で、前後左右気ままに振り回される。手足を踏ん張って、ひたすら揺れに耐える。

谷に入ってすぐに対岸へ渡る橋が現れた。小沢に架かる応急の橋でなんと、構造は丸太を束ねただけ。先行のタクシーがこの橋にさしかかる。タクシーは慎重に、タイヤを丸木橋に乗せる、車幅と丸木橋の幅は、わずかに橋が広い程度である。見守ると、先行タクシーはゆっくり渡り終え、次の試練となる山腹の斜面路へ向かった。2番手のタクシーも渡った。いよいよ我がボロタクシーも丸太橋にさしかかる。橋に乗り上げるところが、直角のカーブなので脱輪せぬかと気持ちが悪い。運転手に任せざるを得ないが、運転手の資質とか、性格などは、つい先ほど出会ったばかりなので、分からない。運転巧みで沉着冷静なことを念じる。無謀なのか、このあたりの普通の路なのか、我が運転手は臆することなく、丸木橋を慎重に渡った。今度はいきなり右上に曲がって、川と平行の上り坂となる。渡ったばかりの沢が右下になり、洪水で一部崩落して狭い路がいつそう狭くなった崖ぎわの路を、エンジン音けたたましく登る。路面は砂と石混じりのデコボコ路である。石に乗り上げるたびに車体が左右に傾く、そしてホコリ。山側に傾くとき

は、少し安心感があるが、谷川に大きく傾いたりすると、谷に落ちそうだ。恐怖感で口の中に、金属味のツバが出る。自分では何もできない、ひたすら取っ手にしがみつくと。お任せメニューだ。あーっ！ なんとということか、すぐ前に行く2番車が崖ぎわの坂の途中で停まってしまった。1番車が掘ったワダチにはまってしまったようだ。2番車のすぐ右脇は、路肩の弱そうな路面が崖から数十センチ残すだけで、邪悪な谷底が呼んでいるように観える。穴から脱出するため、2番車は前進後退を繰り返すが、だめである。我が運転手は2番車と接近しすぎていると判断したのか、バックし始めた。私の所から振り向くと、道がカーブしているので、崖の先の虚空しか観えない。谷川に向かって滑り落ちていくように感じる。どうしよう、と狼狽したが、我が運転手は、巧みにバックで10メートルくらい戻った。

停止していた、2番車から4人が外に出た。人力で押すことにしたようだ。4人掛かりで車を後押しする。再び前進後退を繰り返しながら、車を穴から押しあげた。

今度は、我が3番車である。運転手は慣性の法則を利用して通過しようとし、勢いを付けて突進した。だが、やはり穴にはまってしう。助手席にいたウリさんは、すぐにドアを開けて谷側の車外に出る。彼が降りた場所は車のすぐ脇なので崖すれすれで、一步間違えると転落である。ハラハラしたが、彼はしづといイ(彝)族の男だから、なんとかするであろうと思い、私も続いて山側のドアから外に出て、車の後ろに回る。同乗していた女衆2人も素早く車外に出ている。合計4人で一斉に車を押すが、後輪は砂の中を空回りし、前輪は路面から飛び出た岩カドを乗り越えられない。仕方なく、再び少しバックして、勢いを付けて乗り越える作戦に出る。道がカーブしているのでバックも怖い、車が道路から谷底に飛び出してしまいそうだ。運転者の顔を窺うことはできなかったが、彼も必死であったと思う。何回かの試行錯誤と、お祈りの後、ここの悪場を乗り越えた。帰りのことは考えないことにする。

この先は、車の後押しをすることはなかったが、今度は高度感である。午前中のバスも恐ろしかったが、このタクシーはもっと怖い。狭いホコリだらけの道を、健気に登り、先ほどまで遙か高みにあった北側の尾根が、今では同じ高



美女谷の入口で観た、洪水で流された家



大金川の谷沿いに散在する、チベット族の民家



「巴底土司官寨」の残ったやぐら部分



壊れる以前の1935年に描かれた絵(大川氏提供)

レであった。穴の周りの床には、たくさんのマッチの燃殻があった。たばこを吸いながら用を足すのであろうか。

用が済んで、すっきりしてトイレの外に出た。お礼する物が何もなかった。機内食の豆菓子が残っていたのでこれをあげると、逆に小さなリングをもらってしまった。このあたりの人々は、純朴で優しい。ああ、この家に福あれ。

●「巴底土司官寨」

さで窓越しに対峙する。吊り尾根のような、その剣呑な高みの一画にも、チベット風の住居が何軒かある。そこは今、我がタクシーが走っている道とは明らかに別の道で、下界と繋がっているようだ。どのような経緯の後、このような環境に住むことになったのであろう。私のような、行きずりの観光客には推しはかることはできない。そう思う間にも、タクシーは断崖の道を、ひた走る。ヘアピンカーブで弧を描く少しの間だけ、転落の恐怖から解放される。カーブには崖がないので、落ちる恐れはないのだ。

●新たな危機が

私はこのあたりから、お腹が妙な具合になってきた。昼食にご馳走になったバター茶と、恐怖感に、絶え間ない車の振動が原因だろう、お腹がゴロゴロと喘鳴して張ってきた。早くどこかに着いてほしい。なおもデコボコ路を行く。

土地の傾斜が緩くなり、地形が開けてきて村に着いた。白い家が数軒かたまっている。背後の荒涼とした岩山が、残照に晒されて、聳えている。時計をみるともう5時に近い。畑の向こうに、巨大な壊れかけた古碯が見えた。怖い思いをして来たのは、この建物を観るためらしい。近年、このあたりを観光用に「美人谷」と呼んでいる。美人はどこに？。

皆は一列になって畑の小道を歩き始めた。私も後を追いかけてたかったが、腹具合が限界になった。大川さんに聞いた。「近くにトイレは無いでしょうか？」

大川さんは、心配そうにすぐに、「少し我慢できますか」と云ってくれて、通りかかった民家の中庭に入り、家人を呼んだ。しかしこの家は留守なのか人けがない。仕方なく隣家へ行くが、そこに居合わせた子供は要領を得ない。大川さんは諦めず、次の家へ向かう。私も平静を装って後に続くが、頭の中では「畑の隅でもいいのだが」と我慢の努力を放棄する誘惑に駆られる。嬉や！路地の奥の家は、人がいた。大川さんがトイレを貸してくれるように手短かに頼むと、あるじ風の男性は、快諾してくれた。

拝借したトイレは、ドアを開けると、4畳半程度の何も置いていない部屋で、床に用を足す長方形のほどよい大きさの穴がある。平らな穴だけで前後を判断するものはない。自分で決めればよいのだ(しかし私には、前後を案じる余裕はなかった)。入り口のドアを閉めると暗くなってしまうので、半開きのままにして中に入った。日本の田舎のトイレだと、眼がアンモニアに当てられたり、深呼吸ができないような臭いがするのだが、ここはあまり臭わないトイ

こうして村人の善意のおかげで、無事にトイレを済ませた。先に行ってしまった本隊に追いついて合流し、巨大な石積みの廃墟へ行った。入り口に看板があり、甘孜州の重点文化財という意味の看板があり、名称は「巴底土司官寨」。官寨とは土地の公共の要塞ということらしい。大川さんの説明だと、このあたりは昔から戦乱の地であったので、いくさのための建物、山城だったという。正確な建築年代は不明だが4～500年は経っているのではとのこと。4層の構造物と、四角い塔が背後の岩山と見事に調和している。建築方法は周りの民家と同じで、石を積み上げて構築してある。塗装はなく、土色だ。文化大革命のときに壊されて、今観ているような廃墟になったとか。残っている部分だけでも巨大だ。広い中国のこと故、ここまで手が回らないのか、崩れるままに放置しているように見えた。

このあと、近くに住んでいる巴底郷文化站職員の自宅を訪ねた。その家はほかのチベット住居と同じ作りの白い建物だった。職員氏は大川さんと顔なじみで、歓迎された。この家の屋上テラスへ行って、周りの景観を見渡したり、写真を撮った。3階には先ほど観た「巴底土司官寨」の1935年に描かれたという壊れる以前の絵があった(上の写真)。

夕暮れが迫っているので、あまり長居はできなかった。帰りも同じ道に戻る。来るときは恐怖の隘路だったので、帰りも恐ろしいと思われた。明るいうちにいやなところは、通過したい。一行はタクシーを待たせている村の入り口まで戻って、往路に乗ったのと同じ車に分乗。走り出すとすぐに、なじんってしまった、めくるめく断崖の道になった。恐怖にのあまり身を縮めるはずであったのだが、感覚が麻痺してしまったのか、体が慣れてしまったのかさほど恐怖感を感じなかった。下り坂なので途中で降りて押すこともなく、あっけなく下の舗装道路へ帰着。このあと、「巴底(集落名)」のボン教寺院を見学した。

再び、道路不通箇所を歩いて戻り、丹巴側のタクシーに乗り換えてホテルに戻ったときは、すでに暗くなっていた。

その晩は3003年大晦日の宴会。地元の人たちの歌や踊りもあって、盛り上がった。

参考 ● 中国四姑娘山自然保護区管理局大川さんのホームページは、<http://www.sgns.gov.cn/scholaweb/conts.htm> 四姑娘山の美しい写真が見られます

● 丹巴美人谷大川さんのホームページは、<http://www.sgns.gov.cn/scholaweb/queenvalley.htm>